

初等・中等教育における出産・育児教育と学習者の意識に関する研究

青柳育子

(仙台白百合女子大学)

【要旨】

わが国の合計特殊出生率が、戦後の第1次ベビーブームの1947年には4.54であったものが年々低下し、2005年には1.26となり総人口は減少し始めた。少子化の原因とされているものは、親世代の縮小と、結婚の晩婚化・未婚化、それに伴う子どもの生み方の変化にあるといわれている。

本研究では、女子高校生と女子大生を対象に、初等・中等教育での出産や育児の学習体験について調査し、現在の結婚や育児希望と関連性があるか分析した。結果、大学生の約8割が出産や育児を学びたいと考え、高校生の半数が育児を学びたいと考えていた。また、高校で出産や育児について学んだものと結婚や育児希望があるものの間に関連性があると示唆された。身近に出産や育児に触れる機会の少ない現在、発達段階に応じた教育が必要と考える。

1. はじめに

わが国の65歳以上の高齢者は総務省統計局発表の2006年推計で2640万人となり、総人口の20.7%で5人に1人強を占め、イタリアを抜いて世界最高となった。また、2005年調査の15歳未満の年少人口の比率が13.8%で、こちらも世界最低水準となり、わが国は世界で最も進んだ「少子高齢国」となった。高齢化率は高齢人口が多いことだけではなく、高齢者の比率が高いことを表わし、子どもの年間出生数の減少が高齢化率の上昇に大きく関係する。

一人の女性が生涯に産む子どもの数を示す合計特殊出生率が、戦後の第一次ベビーブームの1947年には4.54であったものが年々低下し、2005年には1.26²⁾となり、わが国の総人口は減少し始めた。

なぜ、女性は子どもを産まなくなったのか。少子化の原因とされるものに、親世代の縮小と、結婚の晩婚化・未婚化、それに伴う子どもの生み方の変化にあるといわれる。本研究では、初等・中等教育の出産と育児に関する教育と女性が出産を望まないことに関係があるのではないかと考え、男性も関わる問題であるが、まず子どもを産む女子を対象に、初等・中等教育での出産や育児の学習状況を聞いた。そして、現在考える結婚や育児希望と関連性があるか、性教育での先進国スウェーデンでの現状などから考察を試みた。

2. 調査方法

(1) 調査対象および調査方法

平成18年6月に、東京都と神奈川県にある私立高校2校の女子生徒221名と群馬県にある短期大学と宮城県的女子大学各1校の女子学生199名に直接回答

によるアンケート調査を行い、有効回答を得た高校生 216 名と大学生 192 名、計 408 名（有効回答 97.1%）を分析対象とした。アンケート調査を実施する前に、調査の趣旨と結果の公表について説明し、同意を得たものから無記名で調査用紙を回収した。

アンケート調査の集計および統計分析は、SPSS-X（Ver.10）を用い、カイ二乗検定を行った。

(2) 調査内容

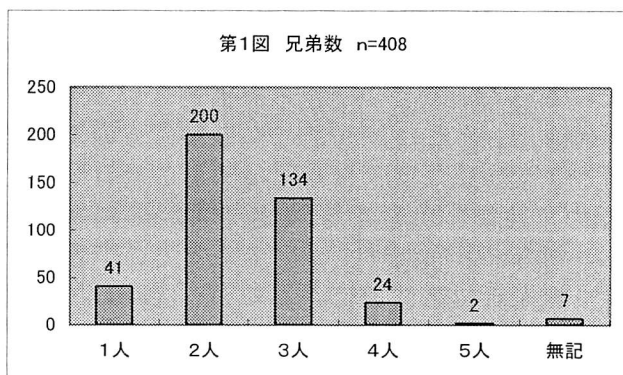
1) 兄弟数

- 2) 小学校・中学校・高校で、出産や育児の学習の有無
- 3) 母親による出産や育児の家庭教育の有無
- 4) 出産や育児の学習希望（時期・場所・誰に）
- 5) 赤ちゃんを抱いた経験の有無（赤ちゃんは、まだ歩けない子ども）
- 6) 小・中・高で保育園や幼稚園への訪問学習の有無
- 7) 結婚希望の有無
- 8) 育児希望の有無
- 9) 希望する子供の数

3. 結果

(1) 対象

408 名の高校生と大学生の兄弟数は、第 1 図のように一人っ子が 41 名（10.0%）、2 人が 200 名（49.0%）、3 人が 134 名（32.8%）、4 人が 24 名（5.9%）、5 人が 2 名（0.5%）、無記入が 7 名（1.7%）で、平均兄弟数は 2.43 人である。大学 1 年生が生まれた時期の 1988 年の合計特殊出生率は 1.66 で、調査対象者の兄弟数との差は 0.77 ポイントである。



(2) 小学校・中学校・高校での出産と育児の学習

出産については赤ちゃんを産むこと、育児は赤ちゃんや子どもを育てることと

し、出産と育児について、小学校や中学校、高等学校で教わったかを聞くと、第1表のように教わったものとそうでないものがいた。

文部科学省の学習指導要領（文末資料）では、出産に関しての内容は、発達や健康に関連し保健で、育児の内容は家庭科に含まれている。小学校の学習指導要領には育児や出産に関する部分がないが、学んだと答えるものがあることから、学ぶ機会を提供した学校があったと考える。中学校では7割を越すものが出産も育児も学んだと答えている。高校では、調査対象者が1～3年生であったため、学んでいるものとそうでないものがあると考え、大学生192名だけの集計も行った。大学生だけの集計では、高校で出産も育児も7割のものが学んでいる。しかし、中学でも高校でも約3割弱の者が学んだ記憶がないと答えている。

第1表 小・中・高での出産と育児の学習 n=408(%)

	小学校で学習 あり	中学校で学習 あり	高校で学習 あり	高校で学習 (大学生対象)
出産	40.7	77.5	50.2	77.2
育児	22.8	72.1	48.0	71.5

(3) 母親による出産や育児についての家庭教育

第2表は、母親による出産と育児教育の有無の状況である。出産も育児も大学生の方が高校生より10ポイント以上高い。年齢が高くなるほど出産や育児について母親と話す機会が増えている。

第2表 母親から出産や育児を教わる(%)

	高校生 n=216	大学生 n=192	全体 n=408
出産	27.8	41.5	34.3
育児	31.5	45.8	38.1

(4) 出産や育児についての学習希望

第3-1表は、出産と育児の学習希望である。出産は43.7ポイント、育児は33.1ポイント大学生の方が希望が多い。高校生より大学生の方が年齢が高くなる分、出産も育児も身近に考えるのであろう。大学生は同級生で結婚や出産したものがいてもおかしくない年齢である。

第3-1表 出産や育児についての学習希望(%)

	高校生 n=216	大学生 n=192	全体 n=408
出産	35.6	79.3	56.4
育児	52.3	85.4	67.9

出産の学習希望者は、第３－２表のように、学習時期を希望している。高校生は高校での希望が半数を超え、大学生は中学での希望が多い。全体で見ると中学生と高校生の時期を希望するもので６割を越し、８割を越すものが小・中・高の学校で学びたいと希望している。

第３－２表 出産の学習時期の希望 (%)

	高校生 n=77	大学生 n=153	全体 n=230
小学生	6.5	26.7	20.0
中学生	18.2	37.9	31.3
高校生	57.1	21.5	33.5
その他	3.9	5.2	4.8
複数回答	7.8	3.9	5.3
無記入	6.5	5.8	6.1

学習場所の希望は、第３－３表のように、高校生は高校を、大学生は中学校を希望したものが多く、ここでも全体の６割を越すものが小・中・高の学校を希望している。家と答えたものは高校生、大学生どちらも１５％前後である。

第３－３表 出産の学習場所の希望 (%)

	高校生 n=77	大学生 n=153	全体 n=230
小学校	5.2	16.3	12.6
中学校	16.9	32.0	27.0
高校	42.8	17.0	25.7
家	16.9	14.4	15.2
その他	3.9	4.6	4.3
複数回答	6.5	9.8	8.7
無記入	7.8	5.9	6.5

教わりたいと思う人の希望は、第３－４表のように、高校生、大学生も教員が４５％を越し、親希望は高校生が２２.１％、大学生が１８.３％である。その他には、医師や助産師など専門職が書かれていた。

第 3-4 表 出産について教わりたい人 (%)

	高校生 n=77	大学生 n=153	全体 n=230
教員	45.7	45.3	46.1
親	22.1	18.3	19.5
友人	2.6	0.6	1.3
その他	3.9	10.5	8.3
複数回答	18.2	18.9	18.7
無記入	6.5	5.9	6.1

第 3-5 表、第 3-6 表、第 3-7 表は、同様に育児学習希望者に聞いた結果である。学習時期の希望では、第 3-5 表のように、高校生も大学生も高校での学習希望が一番多い。8 割を越すものが小・中・高での学習を希望している。

第 3-5 表 育児の学習時期の希望 (%)

	高校生 n=113	大学生 n=164	全体 n=277
小学生	6.2	18.9	13.7
中学生	19.5	28.0	24.6
高校生	60.2	40.2	48.4
その他	5.3	4.3	4.7
複数回答	4.4	4.3	4.3
無記入	4.4	4.3	4.3

学習場所の希望では、第 3-6 表のように、高校生は半数近くの者が高校と答えている。また、家で学びたいと希望するものが、高校生、大学生とも 2 割前後いる。育児は出産に比べ、家で教わりたいと考える者が多いのかも知れない。

第 3-6 表 育児の学習場所の希望 (%)

	高校生 n=113	大学生 n=164	全体 n=277
小学校	1.8	12.2	7.9
中学校	16.8	22.6	20.2
高校	46.0	26.8	34.7
家	20.3	18.9	19.5
その他	6.2	2.4	4.0
複数回答	8.0	11.6	19.1
無記入	0.9	5.5	3.6

育児を教わりたいと思う人の希望は、第3－7表のように、出産と同様に教員と思うものが約半数である。親に学びたいものは、高校生、大学生とも25%前後である。その他の項目には、出産と同様に、医師や助産師等専門職の希望が書かれていた。

第3－7表 育児について教わりたい人 (%)

	高校生 n=113	大学生 n=164	全体 n=277
教員	54.0	40.9	46.2
親	25.7	24.4	24.9
友人	0	1.8	1.1
その他	4.4	5.5	5.1
複数回答	14.1	23.1	19.5
無記入	1.8	4.3	3.2

(5) 赤ちゃんを抱いた経験

赤ちゃんを抱いた経験は、高校生は181名(83.3%)、大学生は170名(88.5%)で、全体では351名(85.8%)である。少子化が進展する社会だが、8割以上が赤ちゃんを抱く機会があった。

(6) 小・中・高で保育園や幼稚園への訪問学習

小・中・高の学校教育で保育園や幼稚園に訪問した経験があるものは、高校生で126名(58.3%)、大学生は133名(69.3%)で、全体では259名(63.5%)であった。学習指導要領の学習内容で訪問学習が勧められているが、その機会を作るのは難しいのかもしれない。

(7) 将来の結婚希望

将来の結婚希望について、高校生は136名(63.0%)、大学生は159名(82.8%)があり、全体では295名(72.1%)である。

(8) 育児希望

育児希望は、高校生は143名(66.2%)、大学生は169名(88.0%)で、全体では312名(76.5%)である。

(9) 希望する子供の数

第4表は、育児希望するものに聞いた希望子ども数である。2人から3人と答えたものは283名おり全体で9割を越した。反対に、育児希望のないものは、高校生で33.8%、大学生では12%である。高校生の希望が少ないのは、まだ結婚や子を育てるということに対して実感が薄いのだろう。平均希望子ども数は、高校生全体では1.41人で、子どもを希望するものだけでは2.13人である。大

学生全体では、2.10 人で、子どもを希望するものだけでは 2.38 人である。

第 4 表 希望する子どもの数 (%)

	高校生 n=143	大学生 n=169	全体 n=312
1人	2.1	1.8	1.9
1～2人	5.6	0	2.6
2人	58.0	55.0	56.4
2～3人	7.7	8.3	8.0
3人	21.0	30.7	26.3
3～4人	1.4	0	0.6
4人	0.0	1.8	1.0
5人	0.0	0.6	0.3
たくさん	0.0	0.6	0.3
無記入	4.2	1.2	2.6

(10) 結婚希望・育児希望と学習の関連性

小学校や中学、高校で出産や育児について学習したことと、将来の結婚希望と育児希望との間に関連があるのか Pearson のカイ二乗検定を行った。その結果は、第 5 表のようになった。

第 5 表 結婚希望・育児希望と学習の関連性

	結婚希望	育児希望
小学校で出産の学習あり	ns	ns
小学校で育児の学習あり	ns	ns
中学校で出産の学習あり	*	ns
中学校で育児の学習あり	ns	ns
高校で出産の学習あり	***	**
高校で育児の学習あり	***	**
母親の出産教育あり	ns	***
母親の育児教育あり	ns	**
赤ちゃんを抱いた経験あり	ns	ns
学校で保育園や幼稚園に訪問経験あり	ns	ns

* p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

高校で出産や育児を学ぶことと、結婚希望や育児希望の間には有意差が認められ、また、母親から出産や育児について家庭教育があることと育児希望の間にも有意差が認められた。初等・中等教育の中では、高校生の時期に出産や育児について適切な指導が結婚や子育て希望につながるのかもしれない。発達段階のポイ

ントをふまえた教育が重要と考える。小学校で出産や育児学習、中学での育児学習、赤ちゃんを抱いた経験や学校で保育園や幼稚園を訪問した経験は結婚や子育て希望とは関連性が認められなかった。

4. 考察

上記の結果をふまえ、初等・中等教育での出産や育児についての学習と、結婚や育児希望との関連を中心に考察を加える。

(1) 初等・中等教育での出産・育児教育

小学校・中学校・高等学校の学習指導要領をみると、中学では「技術・家庭」の家庭分野で家族や家庭を学ぶ時期に育児の学習内容があり、「保健体育」の保健分野で生殖に関わる学習内容がある。しかし、3割弱のものが出産や育児について学んでなかった。同様に高校でも家庭科で育児の学習内容があり、保健で結婚生活と健康の内容がある。しかし、高校の全課程修了した大学生に高校での学習を聞くとここでも3割弱のものが学んでないと答えている。調査対象者が忘れているのかもしれないが、必須科目としてある科目と内容であるが、学ぶ機会がなかったのかもしれない。昨今、高等学校で必須科目であるが、大学受験科目に含まれない科目を教えていない高校が多数あることが明らかとなり問題となった。大学受験と関係のない科目とはいえ、その時期に学ぶ必要のあることについてその機会を奪ってはならないと考える。高校での出産・育児学習が将来の結婚希望や育児希望に関係することが示唆され、また、高校生や大学生の希望として、学習の時期や学習の場所、教わりたい人について、学校関係が他に比べてはるかに多い。江原³⁾は出産に関する大学生の意識調査から社会教育や特に中等教育での「女性学」の導入を提案し、結婚や育児について真剣に考える機会を作ることが重要と言う。人が生きていく上で生活と健康に関する事項は特に重要であり、中等教育での発達に応じた教育が行われることが重要と考える。それには、これらの教育についての教員の共通理解、各教員の役割を明確にするなどの必要があると考ええる。

スウェーデンにおいては、性教育の立場から多くの科目で「愛」や「性」、「家族」などを取り上げ、学外には青少年クリニックがあり、助産師ら専門家が相談に応じる体制があり好評を得ているという⁴⁾。性と出産は関係深いものであり、青少年は正しい情報を得たいと望んでいる。総合学習の時間の活用や保健室機能の拡大、地域に相談機関の創設等が課題と考える。

(2) 出産と育児に関する女子高生・女子大生の意識

国立社会保障・人口問題研究所から2006年9月に発表された「結婚と出産に関する全国調査」によると、結婚する意思をもつ女性の未婚者は9割おり、未婚者の平均子ども希望数は2.10人であった。本調査においては、大学生のみを見ると、結婚希望者は82.8%、子ども希望者は88.0%で、育児希望のあるものの平均子ども希望数は2.38人で、無回答なども加えると平均子ども希望数は2.10

人であり、上記全国調査と平均子ども希望数は同じになった。森本⁵⁾らによる1997年の女子大4回生での調査では、結婚希望者は81.8%、出産希望者は88.1%である。大学生のみの希望をみると10年前の調査とほぼ同じである。また、高校生を見ると、出産では43ポイント、育児では33ポイント大学生より希望が低くなる。それは、年齢が15歳から18歳ということもあり、結婚や子育てが身近でないということもあるのかもしれない。しかし、青柳・小出らが2001年におよそ900名の高校生を対象にした学習希望調査⁶⁾では「赤ちゃんの育て方」を学びたいとする女子高生が79.8%と学習希望の中で一番多く、男子高生でも54.2%いた。大学生に比較すれば低くなるが、高校生にとって育児は興味関心の高い項目といえるだろう。

また、1999年に実施された「青少年の性行動全国調査」において、生命誕生（受精・妊娠・出産）について女子高生は17.8%、女子大生は17.9%が知りたいと答えている。学生という立場で身近ではない出産と育児ではあるが、女性として生きていくうえで結婚するかしないか、いつ子どもを何人生みたいかを自分自身で決めるためには正しい知識を持つ必要がある。

出産や育児は、女子高生や女子大生は聞きにくい事柄として、また、教える側は、どこかで学ぶであろうと考え避ける傾向があるのではないだろうか。少子化が進展し、親も子も身近に出産や育児に触れる機会が少ない現在、学校教育と社会教育双方から教育方法を研究し、取り組まなければならないと考える。

最後に、今回の調査にご協力をいただいた高校生や大学生の皆様、小出房子先生、横山未来先生に心から感謝申し上げます。

注記・引用文献

- 1)総務省ホームページ, <http://www.stat.go.jp/data/topics/topil81.htm>, 2007年3月31日参照
- 2)国立社会保障・人口問題研究所, <http://www.ipss.go.jp>, 2007年3月31日参照
- 3)目黒依子・西岡八郎編, 江原由美子『少子化のジェンダー分析』（ジェンダー意識の変容と結婚回避）勁草書房、2004、p 75
- 4)ビヤネール多美子『スウェーデンの性と性教育』十月舎、2000、p 102～106
- 5)森本恵・中島有加里・山地建二『高知医科大学紀要第16号』（大学生女子の結婚、出産、育児および就業に関する意識調査）2000、p 67～68
- 6)青柳育子・小出房子『生涯学習における生活技術の獲得について』日本生涯教育学会第22回大会発表資料、2001
- 7)文部科学省『小学校学習指導要領』国立印刷局、2004
- 8)文部科学省『中学校学習指導要領』国立印刷局、2004
- 9)文部科学省『高等学校学習指導要領』国立印刷局、2004

資料) 学習指導要領にみる小・中・高の出産・育児に関する主な内容

	家庭科関連	保健体育関連
小学校		○保健 ・3～4 学年 思春期になると次第に大人の体に近づき、初経、精通が起こったりする。
中学校	○ 家庭分野 ・家族と家庭生活 ア 幼児の観察などを通して、幼児の遊びの意義を考える。 イ 幼児の心身の発達を知る。 ・幼児の生活と幼児との触れ合い ア 幼児の生活に役立つものを作ることが出来る。 イ 幼児との触れ合いやかかわり方の工夫ができる。 内容/幼稚園や保育園で幼児とふれ合いを含む	○保健分野 ・心身の機能の発達と心の健康 ア 身体機能は年齢とともに発達する。 イ 思春期には内分泌の働きによって生殖にかかわる機能が成熟する。 内容/妊娠や出産が可能となるような成熟が始まる観点から受精・妊娠までを取り扱う。
高等学校	○ 家庭基礎 ・人の一生と家族・家庭 ア 生涯発達と家族。 イ 乳幼児の発達と保育・福祉。 ○ 家庭総合 ・子どもの発達と保育・福祉 ア 子どもの発達。 イ 親の役割と保育。 ○ 生活技術 ・人の一生と家族・家庭 ア 生涯発達と家族。 イ 乳幼児の発達と保育・福祉。	○保健 ・生涯を通じる健康 ア 生涯の各段階における健康。 内容/結婚生活と健康も含む。

出典) 文部科学省学習指導要領